所属名：生物環境部

実生苗利用によるホオズキのモザイク症状の軽減

実生苗の利用することでウイルス病による品質低下が軽減できる

背景・目的

■ホオズキ産地で、タバコ微斑モザイクウイルス（TMGMV）およびトマトモザイクウイルス（ToMV）による葉やがくのえそ、モザイク症状が問題となっています。
■ホオズキ栽培では一般的に前作の地下茎を次作の苗とする栄養繁殖が行われているため、一度ウイルスが発生すると次作以降も蔓延しやすくなっています。
■2015年の現地調査で、実生苗の利用によりウイルス症状を軽減できる可能性が明らかになりました。

成果の内容

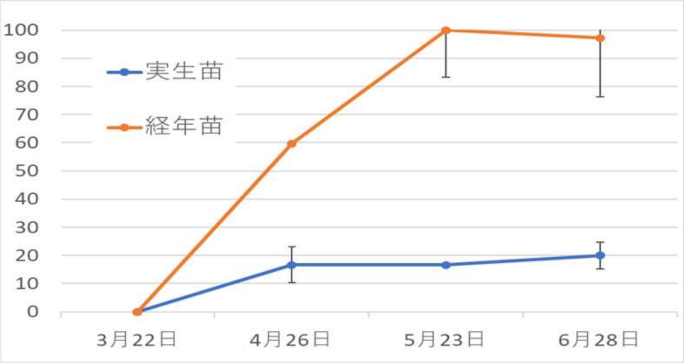

図1　汚染圃場における実生苗および経年苗のウイルス症状発生株率の推移（%）

■ 実生苗のウイルス症状発生株率は、調査期間を通じて経年苗の2割前後と少なくなります（図1）。

■ 経年苗は、定植8週間後の4月時点で、実生苗の3倍以上の株でウイルス症状が発生することから、次作でのウイルス発生は、土壌による伝染よりも地下茎の経年利用が主因と考えられます（図1）。

■ 汚染圃場に定植した場合、実生苗においてもウイルス症状は発生します。残渣の適正処分等、総合的な対策を行う必要があります（図1）。

成果の活用方法(又は期待される効果)

■モザイク症状の発生したホオズキ栽培ほ場では、地下茎の栄養繁殖よる経年苗を実生苗に変えることにより、ウイルス病による品質の低下が軽減できます。

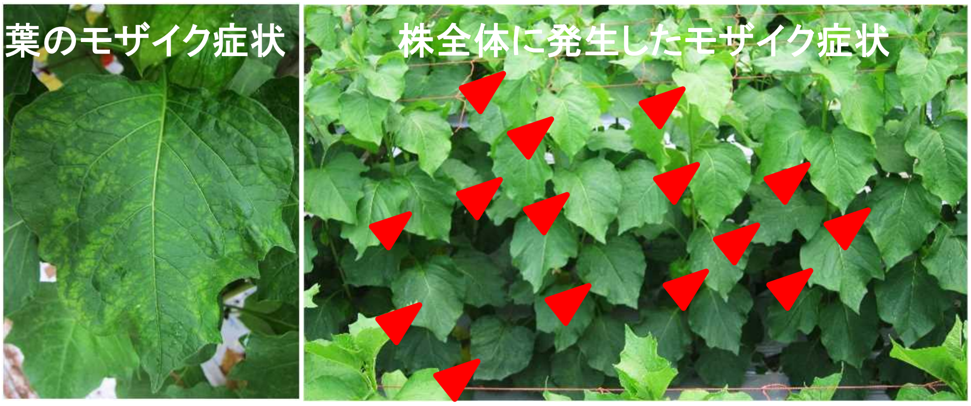

図2　汚染土壌に定植した経年苗の状況

図3　汚染土壌に定植した実生苗の状況

■普及対象地域・面積　　西臼杵、東臼杵、児湯、南那珂

留意点

■ 病原ウイルスは種子伝染するため、使用する種子は必ず乾熱滅菌処理を行う必要があります。

関連研究成果カード：平成29年後期 番号18、関連事業名： 数種弱毒ウイルスを用いたホオズキのウイルス病総合防除技術の構築(国庫)
研究期間：平成28年～30年